



デジモンテイマーズ

第34話

デジタルハザード!

第三稿

脚本ノ小中千昭

Animation Play by Chiak J. Konaka

2001ノ08ノ12

登場人物

松田 啓人〔タカト〕 (10)

李 健良〔ジエンリヤ〕 (10)

牧野 留姫〔ルキ〕 (10)

加藤 樹莉 (10)

塩田 博和 (10)

北川 健太 (10)

李 小春〔シウチヨウ〕 (07)

グラウモン メギドラモン

テリアモン ワピッドモン

キユウビモン

クルモン

レオモン

ロップモン

ベルゼブモン

チャツラモン

スーツエーモン (声のみ)

李 鎮宇 (40).....ジエンの父親

山本満雄 (32).....ネット管制室長

鳳 麗花 (26).....チーフ・オペレーター

小野寺恵 (23).....オペレーター

四聖獣領域のフィールド

極く浅い水に満たされた、あまりにも広大なる放射状の運河。今そこは何も伝え放射する事は無い。

N 「そこはデジモンが自ら生み出した神々、四聖獣の領域。人に棄てられたデジモンは、自らを進化させる輝きの力を、デジタル・ワールドの最も深きところに護っていたが、ある時それが失われた。そして今、そこには——」
運河は全て、フィールドの中央より伸びている。その中央は、果てし無き程の深みに連なっている

『進化種鞘』（しんかしゆしよつ）

円錐状の溝。遥か、遥か深く——。
その最終的な底は、滴型の部屋となっている。
そこに向かって落下してくる幾重にも重なった檻。
それが途中で消滅し——、クルモンが放り出される。

クルモン「くる~~~~~」

その底には水が溜まり——、その中にボツンといるクルモン。滴が垂れる音が響く——。
半透明の鞘に映る、クルモン自身の歪曲した姿。

クルモン「……！」

そこに映っているのはクルモンではなく、かつてそつであった姿——。無機的なシンメトリカルな意匠の進化システム。

クルモン「——クルモンは……、ここにずっと前、いた……」

うつん、と被りを振るクルモン。

クルモン「クルモン、デジモンです！。クルモンだつて何か必殺技持つてるかもしれないです！」

クルモン、一人、あれこれポーズ。

クルモン「クルモン・強い光線！つ！ クルモン・なんだかどつ

ても強いアタックー！」

ばしゃばしゃと水が跳ねるだけー。

クルモン「……くるる〜（哀しそつに見上げる）」

急上昇する視点ー。クルモンからは垣間見えもしない程に遥か上空ー

見えてくるリアル・ワールド球ー。

サブタイトル

物理レイヤー

いつもと変わらない、デジタルの荒野。

光の筋が遠くを通過していく。

ダスト・パケットがもつれ合う様に流れていきー

遠くを歩くグライモン、キユウビモンのシルエット。

グライモンに、ヒロカズとケンタ。キユウビモンに留姫と樹莉が乗っている。ガードロモン、レオモンが傍らを歩いている。

子ども達は疲れていた。

ケンタは上のリアル・ワールド球を見上げている。

ケンタ「ー俺たちー、帰れるのかなあ」

ヒロカズ「ー何言つてんだよ。タカト達を見つけてないのに帰る事なんて考えてんじやねーよ」

ケンタ「けどさー、タカト達と一緒にさー、帰れるのかなあ」

グライモン「タカト、見つかるよ。すぐに」

ヒロカズ「ーああ。悪いな、乗せてもらって」

グライモン「平気平気。グライモン大きいもん。ね、レオモン」

レオモン「ーああ。樹莉、大丈夫か？」

樹莉「つつん、平気。御免ね、キユウビモン」

キユウビモン「構わない」

留姫「それにしても、タカト達どこ行ってんのよー！」

南大門近く

ロップモン、テリアモンと遊んでいる小春。

小春「あはははは、わーい、耳なが耳ながーい」

困った顔でそれを見ているジエン。

ジエン「小春までここに来てしまって——、お父さん達、心配してるだろうな……」

タカト「——（思案）——（強く）早くクルモンを探して、みんなと一緒に帰ろう！」

と——、彼らの周囲にデジノーム達が浮遊してきてまとわりつく。

タカト「やあ、また君たちが！ どうしたの？」

ジエン「デジノーム——、デジモンとは違う人工知性……」

ケラケラ笑いながらも、デジノームは何かを喋りかけようとしている。

タカト「え？ なあに？ 判んないよ」

小春「あつ、このまえ見た子たちねっ！」

ジエン「——（思案）——ブルーカードをリアル・ワールドに物質として送ったのがデジノーム達だとしたら——、彼らは僕たちに、何かをして欲しいのかもしれない……」

タカト「——何か、って……？」

ジエン「判らない——。でも、何かとっても大事な事——」

笑っているデジノーム、門の内側へ飛び去っていく

タカト「あつ、待って！ ギルモンの事をもっと知りたいんだ！」
しかし、姿が見えなくなってしまう。

タカト「——ギルモンの、事……」

ジエン「（はっ）——ロップモン」

ロップモン「何であるか」

ジエン「——君は知らないか、クルモンっていつ、あ、タカト、
タカト、スケッチを見せる。

ロップモン「（絵を見つめ）——我らが神は、その進化の輝きを持つ者を取り戻し、神とこの世界を脅かす者を廃除する為に、塵となっていたデジモンのかけらを再構築し、我らデーヴァを造りたもつた」

小春「（口を尖らせ）ロップモン何言ってるのかわかんない」

ジエン「ロップモン達は、デジモンの神様に作られたんだ、小春」

小 春「うーん……？」
タカト「ロップモン、クルモンを見た事があるの？」
ロップモン「デーヴァのー、チャツラモンが朱雀門の向こうくそ
の者を連れていくのを見た」
ジエン「朱雀門って？」
ロップモン「我らが神の住まわれるところ。この南大門のずっと
ずっと先にある」
ジエン「南……。ここは四聖獣の領域——。スーツエーモン……」
タカト「——そこにクルモンが、いる！ 行こう！ ジエン！」
ジエン「ダメだよ！」
タカト「えっ……」
ジエン、小春に振り向く。
キョトンとしている小春。
テリアモン「もーまんだーい。小春にはロップモンがパートナー
になったんでしょ？」
小 春「くくくーっ。ほらっ」
ロアークを見せる小春。
ロップモン「我、朱雀門に向かう事、止める」
ロップモン、とことこと走って、タカト達を行かせ
まいと手を広げて立つ。
タカト「——ロップモン……？」

進化種覇

寂しそうにしているクルモン。と——、頭上に赤い
熱を伴ったフィールドが覆う。
クルモン「くるー？」
神の声〔スーツエーモン〕「進化の輝きを持つ者よ。お前はデ
ジモンではない。元の姿に戻るのだ」
クルモン「（見回す）クルモンはクルモンでーすよー。デジモン
でーすよー」
神の声「お前はこの世界全てのデジモンに、進化の輝きを与えて
きた。元の姿となり、再び進化の輝きを開放するのだ」
クルモン「——く〜る〜……」

南大門前

ロップモン「我を造りたもつた神の力はあまりに偉大なり」

ジエン「その神から君は罰を受けたんだぞ」

ロップモン「然り。ゆえに、さほどまでに神の力は偉大——」

トコトコとロップモンの前に来る小春。

小春「ロップモン……？」

ロップモン「——（優しく）我は神の意に背いた。しかし我はもつ誰も傷つけたくない……」

小春「——やさしいんだね、ロップモン（なでなで）」

ロップモン「……」

テリアモン「だけどクルモンを助けに行けないじゃないさ——」

ピカッ——。まるで雷の様に辺りが閃光に包まれる。

小春「やん——」

ロップモンに抱きつく小春。

タカト「（見上げ）雷……？」

暗雲の如きに空が淀んでいく——。

再び閃光——。雷鳴の中で、瞬時姿が見える、チャツラモンの巨大な像の姿——。

チャツラモン「神から受けた我が使命、果たす時が来た……」

物理レイヤー

とぼとぼと歩き続けるパーティー。

並んで歩くグラウモンとレオモン。

グラウモン「レオモンはどつして樹莉のパートナーになった？」

レオモン「……お前はどつなんだ？」

グラウモン「僕は——、最初からタカトと一緒にだったもの。タカトが僕を作ってくれたんだよ。だからパートナー」

レオモン「——キユウビモン。お前は？」

キユウビモン「私が留姫を最初選んだ。留姫がその時最も強いテイマーだと知り、私をより強く進化させてくれると——」

留 姫「——そう、だったね」

キユウビモン「だが、リアル・ワールドに来た時の事はよく覚えていない。気がついた時、私は留姫の前に」

レオモン、樹莉を見る。

樹 莉「——ご、御免ねレオモン……。あたし強くななくて……。全然タイマーとして失格だもの……」

レオモン「——樹莉」

樹 莉「え……？」

レオモン「——これは、『運命』だったのだ、恐らく。私は、樹莉とパートナーになる為に、デジモンとしての生を受けた。そう思っている」

樹 莉「——ありがとう——レオモン……（微笑）」

グライモン「レオモンは強くて優しいなあ。どつしたらそんな風になれる？」

レオモン「——私はこれまで戦いしかして来なかった。デジモンは皆そうする運命に生まれている」

グライモン「じゃあ、僕もいっぱい戦えばいいのかなあ」

レオモン「——お前にはお前の運命が、ある」

グライモン「うん……。タカトに聞いてみよう——。ああ、タカトどこにいるのかなあ」

南大門前

タカト「ジエンは小春と離れたくない。お兄さんなんだもの当然だよな。だから、僕が見てくる。テリアモンと一緒に」

テリアモン「ジエン、いいよねー」

ジエン「——うん……。何か気が進まないんだけど……」

タカト「大丈夫！ 危なくなったら、すぐ戻ってくるから！ 本当に四聖獣が向こうにいるんだったら、一番強いデジモンだけど、この世界を護ろうとしている筈だもの。話せば判ってくれると思う」

ジエン「——（納得出来ない）でも……（ハッ）」

ドドドオオオオン！ タカト達のすぐ向こうに落雷！
否！ 閃光と煙の中に——、轟くエンジンの音——。

ジエン「なっ、何!？」

タカト「——ベルゼブモン……」

ヴォーン！ ヴォーンヴォーンヴォーン！

姿を現す、バイクに跨がったベルゼブモン。

ベルゼブモン「——何だよ、そんだけっきゃいねえのか？ 他の連中もろと片づけてやるつもりだったのによ」

ジャキッ！ 銃身を切り詰めた銃を構える。

タカト「——何で僕達を殺そつとかするんだ!」

ベルゼブモン「俺が進化するには、それが条件だったからだ!」

テリアモン「ジエン!」

ジエン「——よしっ!」

カード・スラッシュ

ジエン「カード・スラッシュ！ 超進化アラゲインS!」

テリアモン／ラピッドモン進化メドレー

テリアモン「テリアモン、ワープ進化！ ラピッドモン!」

南大門前

小春らを護ろつと立ちはだかるラピッドモン。

ベルゼブモン「ふん。手前一匹じゃ手応えもねえ」

ラピッドモン「なーめーんなーつつっ!」

ギョーン！ 凄まじい速度で突っ込むラピッドモン。

ラピッドモン「ラピッドファイア!」

両手から攻撃!

しかし微動だにしないベルゼブモン。

ベルゼブモン「痺くもねえぜ——。消えちまえっ!」

ドオオン！ ドオオオン!

ベルゼブモンの銃が火を吹く!

ラピッドモン「わああっ」

ラピッドモンの右耳、左肩が被弾!

千切れて量子分解。

小 春「テリアモン！」

ジエン「（ほぼ同時に）ラピッドモン！」

タカト「（慄然）——こんな、こんな時に——ギルモン、どうしていてくれない！」

ドオン！ 南大門をなぎ倒し落下するラピッドモン。

ベルゼブモンの銃口、タカトらに向けられた。

怯える小春をギュッと抱くロップモン。

タカト「——（渾身の声）ギルモオオオオオオン！」

タカトの声、遥か頭上へ——。

物理レイヤー

グラウモン、ハツとなって立ち止まる。

ヒロカズ「お？ どうしたグラウモン」

グラウモン「今、タカトの声、聞こえた」

樹 莉「——あたしも、聞こえた」

留 姫「ええ？」

ケンタ「えー？ そんなの俺——」

と——、微かにエコーとなって聞こえるタカトの声。

ケンタ「！」

レオモン、ハツと警戒する構え。

ゴオオオオ！ 光の柱が急速に接近してくる。

ヒロカズ「やべえ！ 早く逃げなきゃ！」

樹 莉「——あそこ！ あそこから聞こえるの！」

キユウビモン「——確かに、あそこからタカトの声が聞こえる」

タカトの声「（微かなエコー）——いぎいるもおおおんんん」

グラウモン「行く！ タカトのとこ行く」

ヒロカズ「ちょ！ 待てよグラウモン！ あの光の中入ったらど
こ飛ばされるか判んないじゃねーか！」

グラウモン「でも行く！ タカトが呼んでいる！」

レオモン「——これも、『運命』かもしれない……」

留 姫「——行こう！ こんなとこぐたくた悲いているよりマシ
だよ！ 飛び込もう！」

キユウビモン「（僅かに笑い）留姫、らしい」

留 姫「（微笑）あたしはあたし！」

グラウモン「ガードロモンも僕に乗って！ ヒロカズ、ケンタ、
しっかり掴まってて！」

ヒロカズ「こうなったら行くしかねーかつ！」

ケンタ「ひー、マジかよー」

と、レオモン、樹莉に手を差し伸ばす。

樹 莉「……」

レオモン、樹莉を胸にしつかりと抱く。

留 姫「——キユウビモン！ 行くよ！」

キユウビモン「はっ！」

グラウモン「わあああっ！」

光の中に飛び込んでいく——。

光のトンネル

ゴオオオオオオオオオ！ 凄まじい速度で突き進んでいくグラウモン達。

幾何学的なテクスチャーのトンネル——。

と——、グラウモンらが通過した後——、壁の奥に巨大な像の影が浮かんだ。

チャツラモン「神のお怒りを鎮められるのも、あと僅かの時——。
神に背く者共は——一つ所に集まる——」

南大門前

ドゴオオオオ——

タカトらのすぐ近くの地表にクレーターが出来る。

小 春「わあああああん！」

泣きだす小春とロツブモンを抱き上げ——

シエン「くそっ！ ラピッドモン！ ラピッドモン大丈夫か!?!」

半ば地面に埋まったまま倒れているラピッドモン。

ラピッドモン「——シエ、シエン……。こいつ、強い……」

ベルゼブモン「当たり前だ！ 俺はこのデジタル・ワールドで最

も強いデジモンになるんだ！ お前らの様な半端なデジモンなんて相手にならねえんだよ！」

タカト「まってよ！ 君はインプモンだった。僕達と一緒にキャンプに行っただじゃない！ 公園で一緒に遊んだりしたじゃない！」

ベルゼブモン「——インプモン？ そんな奴はもう、死んだ！」

ジャキ！ 銃を向けるベルゼブモン。

その時！

淀む空が割れ——、光の柱が激烈にそこに突き刺さる様に現れる！

タカト「!?——!! グラウモン！」

光が消えると——、そこにはグラウモン達が。

留 姫「（キユウビモンから飛び下り）こんなところで何やってたのよ！」

グラウモン、タカトの前に。

グラウモン「タカト！ 会いたかったよーっ」

タカト「僕も！——（ハッ）——」

グラウモンに手を伸ばそうとして、止めるタカト。

10

フラッシュユノ32話

SHIBUMI の図書館。投影された、タカトの描いたギルモンの絵。それがデジノーム達により、ダスト・パケットと統合され、ワイヤーフレームとなり、現れる、もう一体のギルモン——。

南大門前

グラウモン「どうした？ タカト」

タカト「——ギルモンはデータ……、ただのデータの集まり……」

ベルゼブモンの前に四肢を伸ばし——

キユウビモン「——ベルゼブモン——。お前——」

タカト「（ハッ）」

ベルゼブモン「うるせえ狐！ 黙ってる！ そんな眼で見るとんじや

ねえ！ お前らの臺場はここだアッ！」

両手の銃を回転させて排莖、弾丸装填し——、構えるベルゼブモン！

ドガガガガガガガガガガ！

自動連射モードでタカト達を撃つベルゼブモン。

ガードロモンがシエンと小春、ロップモンの前に立ちほだけり——、両腕を差し出す。

ガードロモン「乱暴者は許さんです！」

ウーン。腕のハッチが開き——、顔のついたミサイルが発射！

ベルゼブモンの顔面に当たるが——

ベルゼブモン「うぜえ事すんじゃねえっ！」

ベルゼブモン、バイクをターンさせ——、ガードロモンに銃口を向けつつ轟進してくる！

ガードロモン「う、まずい……」

グラウモン「エキゾースト・フレイム！」

グラウモン、炎弾を次々に吐く！

ドオオン！ ドオオン！

その爆発を巧みに交わし——、反転して——迫るベルゼブモン！

ヒロカズ「何やってんだよガードロモン！ 逃げるんだって！」

ケンタ「やつ、ヤバイ！ 間に合わない！」

シエン「君たちだけでも早く逃げる！」

ヒロカズ「そんな訳いくか！」

ヒロカズとケンタ、シエンと小春を庇つ様にその場から逃げ出す。しかし再びベルゼブモンが迫る！

キユウビモン「だあああ！」

横から突っ込むキユウビモン。

横転するバイク。放り出されるベルゼブモン。

ベルゼブモン「きしょうっ！」

留 姫「キユウビモン！」

体当たりで自ら傷ついているキユウビモン。

留 姫「キユウビモン、傷ついている……、進化！ 進化して！」

キユウビモン「——進化……」

よろけるキユウビモン。

立ち上がったベルゼブモン、銃を向ける。

キユウビモン「（振り絞り）狐炎龍！」

蒼い炎と化したキユウビモン、ベルゼブモンの腕に絡みつき——、銃を焼き払う。

ベルゼブモン「うがああッッ！」

蒼い炎から戻るキユウビモン——、そのままがっくりと倒れる。

カードとロアークを持ったままち尽くす留姫——。

留 姫「キユウビモン!!!」

ベルゼブモン——、焼け焦げた両腕を——握り締め——、開くと、鋭い爪をむき出しにする。

ベルゼブモン「——上等じゃねーか……」

ベルゼブモン、キユウビモンの腹に鋭い爪を突き立てんと振り上げるー。

グラウモン「やめる！ ベルゼブモン!!!」

突進していくグラウモン。

タカト「——グラウモン——、グラウモン！ そつだつ！ ベルゼブモンはもう悪魔になっちゃったんだ！ 倒せ！ 倒せええええ！」

タカトの声にビクツとなる樹莉——。

樹 莉「タカト君……」

ブン！ 後ろ手に振り回したベルゼブモンの腕、グラウモンの鼻面を痛打！

グラウモン「ぐえっ！」

ベルゼブモン「後でゆっくり貴様も料理してやるぜ。まずはこの糞生意気な狐からだ！ よくもこれまで俺の事をコケにしてくれたよな！」

キユウビモン「イン、プモン……」

ベルゼブモン「うるせえええええ！」

留 姫「駄目！ キユウビモン逃げて！ どつしたらいいの!?

どのカード使えばいいの!? どつしたらいいのよ!?

振り上げる爪——。

ベルゼブモン「俺は——、お前を殺さなきゃならねーんだ!!!!」

振り下ろす爪！

キユウビモン「——眼を、覚ませ——」

ベルゼブモン「黙れ黙れ黙れええええええ！」

キユウビモンの腹を扶ろつとする爪——！ が止まった！

がしつと、背後からその腕を掴むレオモン。

樹 莉「！……」

レオモン「事情は知らないが、お前は何者かに蹴らされているだけだ。己の姿を滑稽に思え」

ベルゼブモン「!?——な、何だよ手前——」

レオモンの巨大な拳がベルゼブモンを一発！ 二発！ 殴りつける！

ベルゼブモン——、ひるむ。

レオモン「力で進化など出来ない——。私はもつ、それが判つたのだ（樹莉に目をやる）」

樹 莉「——レオモン……」

レオモン「——お前の運命は、あの子ども達を危める事ではない」

ベルゼブモン「！——るせええええええええつ!!!!!!!!!!!!!!」

樹 莉「！」

タカト「！」

キユウビモン「……」

ベルゼブモンの爪、レオモンの胴を貫いている。

がっ、と開かれる爪。

レオモン「がっ……、うう……、はっ——、はっ……」

不規則な律動——。レオモンの命が消えよつとしている。

キユウビモン「うがあああああつ——」

策も手だても無く、ただぶつかっていく傷だらけのキユウビモン！

ゲシツ！

虚空に舞つキユウビモンの躰。ベルゼブモンの脚が蹴り上げた。

レオモンの胸、量子分解し始める。

レオモン「——何故、判らない……。何故、話を聞こつと、しな
い……」

樹 莉「（「つそ」と首を振るだけ）」

ヒロカズ「レオモンが……、レオモンがやられたなんて……」

ケンタ「（涙声）に、逃げてよ！ そいつから早く逃げてよおお
お！」

ジエン「——レオモン、く、くそつ！」

タカトは——、タカトは拳を握り——、自分の唇を
歯で強く噛んでいた。生まれてからこの様な『怒り』
を覚えた事はない。

完全に量子化していくレオモン——。その目は——
樹莉を見つめていた。

レオモンの声「（樹莉にだけ聞こえる）——これが、私の、運命
だったらしい——」

樹 莉「え……？ ————いやあああああつ……！！！」

量子化したレオモンをロードするベルゼブモン。

ベルゼブモン「強い奴をロードするんだ——。俺は、俺はもつと
強くなってやる！ 俺は——俺はあああつ——」

力の抜けた顔で、ただ見つめているグラウモン——。

グラウモン「————レオモン……、優しくつて、強かった
レオモンが……」

徐々に、ゆっくりと、グラウモンの瞳が小さくなっ
ていく。

タカト「——なんて酷い事を！ なんて、なんて最低なんだ！！」
ふる、つと身を震わせるタカト。それ程までにアド
レナリンが噴出している。

タカト「お前なんか、お前なんかあああつ……！！！」

タカトの躰、前に進もつとすると——
閃光——。

タカトの巨大な分身の様に、脇からその巨体を現す
メガログラウモン。

タカト「くおおおおおおおおおつ——」

メガログラウモン、呼応して口蓋を大きく開き咆哮——

その目は戦鬪獣としての存在のみを示している。

タカト「ぐ、わあああああつー！」

全身に力を込めて叫ぶタカト。

メガログラウモン「ぐおおおおおおおんんんんー！」

それを、おぞましい物の様に見ている、樹莉。

樹莉「——なに、これ……、何なの？ 何が起きてるの？」

ヒロカズ「加藤！ そんなとこ突っ立ってんじゃねーっ！」

腕を引っ張るヒロカズ。

樹莉、触られたくないと、過剰に反応し、腕を振り
払う。

樹莉「触らないで！ あたしに誰も触らないで!!!!」

ヒロカズ「加藤……」

ベルゼブモン「——ふん、やつと完全体かよ。成りばかりでかく
つたつて、俺は究極にまで進化してんだよ。お前なんか
所詮犬死にするだけだ」

タカトの目、まるで獣の様に血走って——

タカト「こいつを絶対に、倒す！」

そのタカトの獣の目とメガログラウモンの目が重な
ると——

ぐわッ！ 開かれるメガログラウモンの口。メタル
のシールドの内側の、龍の口蓋、鋭い牙、ぬめぬめ
とした粘膜が露になり——

メガログラウモン「があおおおつー！」

バシユ！ 背中ofジエット・ブースターを点火させ
巨体とは思えぬ速度で急接近！

ベルゼブモン「——（ニヤ）」

飛翔するベルゼブモン——

腕を振り上げ——、銃の指の形で振り下ろす！

と！ 腕のスライドが作動し、両手に二丁つつ、大
口径銃を持って——

ベルゼブモン「サイボーグ野郎！ 消えちまえ!!」

ドガガガガガガガガガガガガ！

ドガガガガガガガガガガガガ！

肩、胸のメタル部が損傷していく。

しかし——、龍であるメガログラウモン、ひるまずに——、跳躍！

ベルゼブモンの喉に噛みつく。

ベルゼブモン「ぐあっ！」

タカト「そつだ！ 行け！ やっちまえ!!」

樹 莉「（小声）やめて……」

ベルゼブモン——、自ら銃を捨て——、再び鋭い爪を伸ばし——

タカト「あッ！」

ザク！ メガログラウモンの両脇を突き刺す！

メガログラウモン「ぐはっっ……」

力が抜けていくメガログラウモン。

タカト「負けちや駄目だ！ メガログラウモン！ くそお！ もっ

と強く進化——！ 進化するんだ！ 進化アアアアア！」

思わずDアークを握りしめるタカト。

四聖獣領域中央底／進化種鞘

タカトの叫び、言葉ではなく、エコーだけ、聞こえてくる。それはまるで地獄から響く様にクルモンに聞こえる。

クルモン「くる~~~~」

怯えて耳を覆つクルモン。

と——、額の三角の紋章が輝き始める。

クルモン「（はっ）くるっ！ ダメくる！」

今度は額を覆おつとするが——、強い光はそれを遮り、放射される！

と！ その光を受けた進化種鞘、無数の線の一つに凝集され——、上に漏斗状に伸びる 運河 の一つを伝つて急速に走っていく！

四聖獣の領域／俯瞰

運河を高速で走る、光。

それは朱雀門を越え、鳥居をくぐって――

南大門前

ザッ！ 両爪を引き離すベルゼブモン。

転落していくメガログラウモン――。

と！ その着地しようとする場に、運河を伝って光が届く！

ベルゼブモン「何ッ!？」

メガログラウモンの、唯一残された胸アーマー部、ハザード・マークが真っ赤に明滅している。

シエン「！ 胸のマークが光ってる……！ 何が起きるんだ!？」

メガログラウモン「ぐおおおおおおおんんんんん!！」

空が甘埜の中のように、粘液の渦を描く。

そこを走り回る無数の光――データ。

デジタル・ワールド自体を揺るがすパワーがそこに集まっている。

ネット監視局

ほぼ復旧したヒュプノスの全周スクリーンに、ハザード・マークが明滅。

麗花「ネットワーク、最深部レイヤーにデータが異常集中しています!！」

山木「最大級の危機――。デジタル・ハザードが……」

ヒュプノスのスクリーンが真っ赤に染まる。

恵「（怯え）こゝこの規模は過去最大――。リアル・ワールドにも影響が及ぶものと思われます」

新宿西都心

中央公園辺りから、赤い光の筋がいきなり立ち昇る！

鎮宇の部屋

ハザード・マークがモニタを埋め尽くしている。

鎮宇は窓から空を見て

鎮宇「どつしたんだ!?! 何が起こっている!?! くそっ! シエン
リヤ! 子ども達! みんな無事でいてくれ!」

ドン! 窓を拳で叩く。

鎮宇「——私は無力だ……。間に合わない……」

南大門前

紅蓮の炎の中に蠢く巨大な影。

シエン「!? 進化するのか!?!」

タカト「進化——、そう! 進化だ! 究極体に進化するんだ!」

光に包まれたメガログラウモン——、真っ赤な炎が
軀を取り巻く。

その業火の中で——、より巨大な姿、より禍々しい
姿へ変容していく。

タカト「——進化……」

最早、巨獣の咆哮しか聞こえない。

赤黒い炎の中から、その姿を現す究極の姿——!

メガドラモン「ぐおおおおおおおおおおおおおんんん!」

知性、理性を失い、絶対的な強さのみを獲得した究
極の姿。

タカト「僕が——、僕が望んだからこんな姿になったの……?」

無数の鋭い牙が並ぶ口蓋を開き、粘液を滴らせ、

メガドラモンはベルゼブモンを食らおつと——

樹莉「やめてええええええええつつつ!!!!」

タカトが握りしめていたDアーク、割れて、落ちた。

以下次回